

〈書評〉

三星宗雄編著

『世界の色の記号—自然・言語・文化の諸相—』

川端康弘（北海道大学大学院文学研究科教授）

本書は2002年に発足した、神奈川大学人文学研究所の共同研究グループ「色彩と文化」の研究成果をまとめたものである。著者たちには申し訳ないが、最初はなんとなく口絵の美しさとその量の多さに惹かれて手を取ったのであるが、だんだん読み進めるうちに色彩と人間の営みの何ともおもしろい関係について次々に実例で示してくれる本である、ということがわかってきた。実際、広範囲にわたる学問分野の研究者が参加して、表題にある自然・言語・文化と色の関わりについて、私ども一般の読者の目から見ても興味深いテーマが取り上げられている。「まえがき」にあるように、ほぼすべての著者が海外に出かけて調査を行っているからだけではなく、内容的にも「世界の…」という看板（表題）に偽りはない。本書は6章に分かれ、色彩に関する方法論と、自然、言語、景観および文化と色彩の関係について論じた論文が各章の節ごとに配置されている。

1章では、南米や日本各地の広範囲にわたる地域で、膨大な数の植物の葉や花などのサンプルを測色し、その結果の分布から私たち人間が進化してきた視環境の色分布の特徴に迫ろうとしている。その過程で測色データからCIE色度図上の主波長やカテゴリー色名まで変換できるアルゴリズムを開発しており、今後は変換の妥当性を上げていく必要があるが、膨大なデータの整理には有効であろう。結果の中で、葉は緑ではなく黄緑色であるということ（主波長の分布はとても狭く、しかも世界共通である）、そして緑という色が自然の中で欠落しているかきわめて稀だということが述べられているが、とても意外であった。私たちの4つの主要な色感覚のうち、ユニークな赤

（つまり赤らしい赤）、黄あるいは青は自然の中に多くあるのに、緑らしい緑がほとんどない。これは指摘されるまで気づかなかった。確かに植物は自然を構成する1要素に過ぎず、緑色をしたものは他にもあるかもしれないが、私にはいまにわかに思い浮かばない。浮かぶのは著者が言うように貴金属の鉱物くらいだが、普段目にするものでもない。緑のない環境で進化した人間の色覚であるはずなのに、なぜ4つの主要な色感覚に緑が入るのか、不思議である。著者によれば、緑は直射日光のない森の中や水中、もしくは日の出前や日没の暗い環境にしか存在しない。もしかしたら私たちの祖先はそのような環境で生きていたのだろうか。環境と知覚システムは密接な関係にあるが、この発見はその議論に一石を投じるものであろう。

2章には、国際的な視野に立って言語と色彩の関係について考察した論文が並んでいる。たとえば同じ東アジアにあっても、日本と韓国、中国では辞書における慣用色名の扱いや原色による中間色の表現などに大きな違いが見られるのは興味深い。これらの研究は今後多言語間の体系的な検討を行うことによって、より興味深い知見を将来私たちにもたらしてくれるのではないだろうか。7節ではスペイン語の色彩表現と色彩文化について記述されており、rojo（赤）による表現の頻度の高さと類義語の多さが指摘されている。また「色(color)」という語の変化型である「色づいた(colorado)」という語は、赤系色を指すそうだ。素人目にもスペインというと赤というイメージがあるが、この類義語の多様さ(P.178)を見ると確かにうなずける。色名の分布に関しては、3節

で日本人の大学生を対象とした調査報告がなされている。同じ著者による1章の知見を基にした仮説「緑らしい緑が自然界において希少であることが日常場面で緑を見る機会を減らし、緑の慣用色名の減少につながる」は、残念ながら確認されなかったが、命名のしやすさや修飾語との結びつきなどで色相による差が認められたことは興味深い。

3章は景観と色彩について論じられている。世界各地の景観色が紹介されていて、それだけで楽しいが、統一された色調はやはり強い印象を与えることがわかる。それがユニークで好ましい配色であれば、その地域の一番の特徴として記憶され、思い起こされるはずだ。一面の黄赤色の屋根や青の街の美しさを実際に見て感じてみたいものだが、とりあえずは本書の口絵で楽しんでみるのも一興である。

4章では文化と色彩が論じられている。1節では色彩と空間の視点からみた活け花が語られている。自然環境では空から大地に向かうにつれて明度は徐々に低くなるが、著者が指摘するように、活け花作品にもこの上下の明度変化がほぼ共通してみられるそう。芸術的な素養もないので、そう言われるまで私はまったく気づいていなかったが、確かにこの上下の明度変化を逸脱すると、人は違和感を持つかもしれない。自然と同じ色調の配置が自然なるものを感じさせ、安心や安らぎを与える。これが活け花には重要なのだろう。もう一つ、色調の空間配置を左右する活け花の全体的形状に関して、ハワイと日本の人の作品比較が興味深い。対照的で均整の取れた外形に、間隙なく草花を飾って存在感をだすハワイの人の作品に対して、日本人の作品は非対称的で、草花のボリュームを落として間隙の空間の見えを重視する。活

け花に対する考え方の違いがでていて興味深い。これは6章の風景との対話に出てくる、日本庭園と西洋庭園における設計コンセプトの違いとも対応しているように思う。4節では色彩とジェンダーについて記述されている。欧州のトイレ表示には、男女に対して黒と赤、あるいはブルーとピンクといった区分けがまったくないことが驚きであった。色覚研究者として、色とイメージの多様性が個性の開花に重要であると常に考えつつも、女性的なもの、男性的なものに安易に2色を振り分ける日本の慣行や教育に自身が浸かりきっていることがよくわかって恥ずかしい。

5章は少し変わり種であるが、コンピュータ上のイメージ画像を用いて、配色デザインの異なる3つのバレーボールの回転方向をどれくらい素早く認知できるかを厳密な実験室の環境で測定している。3つとも公式の試合に使われたボールであり、かつ実験に参加した評価者が現役のバレーボール部員であるにも関わらず、ボールの種類に応じて明確な差がみられるのは興味深い。最も成績の良いボールと悪いボールで、反応時間、正答率とも3割ほど違うのであるから、使うボールによって試合のスタイルもずいぶん変わるのではない。どのボールを使うとバレーの試合が楽しくなるかは、読後のみなさんの判断にお任せします。

本書の内容は多岐にわたっているため、編集は大変な作業であっただろう。編者の苦勞が目につく。その苦勞のかいもあって、本書は色彩と人間の関わりに着目する研究者にとって、とても魅力的な1冊になったと思う。まだ萌芽的で削りたての研究が多いのだけれど、今後の展開を考えるとそれが楽しみなところでもある。